

外面的に云へば、世界中の有ゆる事物は夫々の原因を有してゐるけれども、(其實相は變化の結果である故)世界其物には夫がない。何故なれば、因果律は世界あつてのもの、世界の内側うちがはのみに通用するものだ。

此ことはカント哲學を正當に理解して得られる重要な結論であるが、一般には未だに承認されてゐない。夫で世人は今も原因と云ふ代りに、世界の本原など、名目丈を擦替へて古い邪説に執着し、此點に關する私の議論などは全然顧みても呉れぬ。實際私の著述は大地の上に放り出されてゐる！然も一方には取るにも足らぬ愚劣至極の説が大層らしく祭り上げてある！之は皆俗人共の有神論欲いしさからのこと、——あの有神論*——彼等は何時も大事な神様のことが説いてないと氣がすまぬ。然るに私には神などに就いては何も述べるのがないから——後世を待つより外はないが——不評も何も皆之丈がもと、——*hinc illae lacrimae!* (此故に此涙!)——私は何所迄も眞理のみを大切と心得て、彼等の大事な神様には懸構ひも

しなかつたのだ。夫でも神は彼等といふ信心家には片時もなくてならぬもの、——畢竟彼等には神と云ふ常套語が唯一の寶で、さればこそ汎神論と云つても笑顔を向けるから餘程可笑しい。

*有神論の組立に眞理はいらぬ、——只細工で出來上る。

第四〇一節

世人は私の哲學が憂愁と絶望とを與へるとして不平を鳴らすが、其實私は彼等の罪惡の報として未來の地獄を説く代りに、罪惡のある處、即ち此世界が既に地獄めいたものであると教へた迄だ。

第四〇二節

私の著述が全然世に認められなかつたことは、私が現代よりも立遅れてゐるか、又は其反對であるかを證明する。孰れにせよ今は只「第三者は沈黙のまゝ」ことでも云つておけばよい。

第四〇三節

單純の有神論は、世界の存在を説く以上、必らず存在以前の無存在をも承認しなければならぬ。乃ち其所謂世界とは、偶然的のもの、——即ち其存在と共に其無存在も同様に可能であるもの、——随つて正當には寧ろ存在すべき筈のものではないとしか考へられぬ。

私の哲學、——其一大特徴は世界の超越的説明と反對した完全の内在的説明、一切の神話的分子、假定説、又は因襲的解釋を全然含まぬこと——此の私の哲學によると、世界は生存意志の主張の現象であり、又同一意志の否定は主張の反相として現はれ、優に既存の世界を斷滅し得るのである。

第四〇四節

疑もなく多くの人々は、私の哲學の不評判なのは、畢竟夫丈に價值のないが爲であると速斷するであらう。然し乍ら若し今の世人が實際に眞理を渴仰してゐる

者であつたならば、私の哲學は發表されると同時に非常なる注意を惹起して、賛同の聲は日毎に募つて行つたに違ない。けれども今頃哲學を云爲してゐる者共は、孰も皆教授の職を當込んでの似非學者であるのに、私の哲學はあのお有難い基督教の支柱にする積で仕上げたものではなく、寧ろ宗旨のことなどは全く係はりのないこととして打棄てゝあるから、彼等に取つては全然方角違ひのものであつた。成程！此點から眺めると私の哲學は、ヘーゲルのものに比べて遙かの背後に立つてゐるかも知れぬ。此ヘーゲル哲學が夫自身を基督教と徹頭徹尾の同一物、——稍少し組立を改めた迄の基督教ぢやと臆面もなく吹聴してゐる様子は、丁度先立つた牧師の寡婦に其場で直ぐに結婚しやうと申し出た「眞直路が最良の路」の求婚者其儘だ。

貧相な若輩共が、何時迄も日雇稼ぎをして哲學を汚さぬ様に、喰量丈の麵包切を宛がつたがよい！基督教も末になつたと知らずに、矢張御世盛りの積りで御奉

公をするのか。汝等教授の椅子に構へてゐる英雄達、汝等輕佻浮薄な時代と愚昧な俗民とにお追従する哲學者、私のことを素知らぬ顔して素通りにするがよい！後々の時代は決して私をさうは待遇せぬのだ。汝等の卑劣な同類同士の申し合せが破れて、嘘八百の和讃が静まると、其時こそは斯様な墮落した時代と違つて、新規の尺度で眞實が鑑別されるのだ。實際私の學說の顧みられぬ主なる理由は、今と云ふ時代では、民衆の頭腦に愚鈍を封じ込む爲の、——又世間を闇にする様な、プロテスタント教とエズイット教とを調合した官營の偽物の知識が、眞の哲學や思想に成り代つてゐるからのことだ。——あの俗惡無類のヘーゲル哲學。

第四〇五節

私の著書などは其性質上、或種の威力にでも訴へぬと、讀者に精讀を勧めることが六ヶ敷い。何故なれば一般人は決して獨りでに其んな辛抱氣は起し得ず、と云つて精讀の必要な譯を悟るのは、彼等の及ばぬ所であるからだ。

第四〇六節

哲學教授の連中は、つまらぬ人物や著書を擔ぎ上げて賞め立てるのが至つて上手だ。之は魚心を示して水心を得やうといふのだ。そんなことは私には出來ぬ！私は何でも其物の有の儘の名前で呼び立てる。

第四〇七節

I stood among them but not of them.

(私は彼等の中に立つてはゐたが、彼等の仲間ではなかつた。)

第四〇八節

今の哲學社會の喝采など私には鏗錢程の價値もない。彼等は純粹の眞正の高遠の學說には一向に氣が付かず、却つて拙劣の誇大の見懸倒しの、全然無意味の、あのヘーゲルのなぐり書きを大事がつて隨喜してゐるではないか。此んな社會の喝采が私に何だ？ Hagedorn の言葉を借りると、

猶太人に挨拶されたと言はうか
 娼婦に笑顔を向けられたと言はうか。

第四〇九節

政府の御用通りに哲學を切賣する商人根性の哲學屋の爲に、其市場を毀ち信用を奪つてやるのが私の決心。

第四一〇節

文部省の役人共は、私を利用することが出来なかつた。夫で私は自分が彼等に利用される様な安學者でないことを天に感謝する。實際彼等は雇人根性のものしか利用することが出来ないのだ。

第四一一節

歐羅巴中で政府と何等かの縁故をもつた學者は、皆んなで隱密に共謀して有神論を守り立てゝゐる。即ち彼等は有神論に不爲と見るが否や、互ひに力を合せて

如何なる眞理をも叩き伏せやうとするが、其熱心と執拗とは自分等の邪惡な良心の照返しであるとも知らぬ。私には斯様な眞似をしたり、乃至は彼等の卑劣極まる仕業を無理にも黙過したり似而非學者に追従したりすることが出来ぬから、さてこそ政府からの恩典などには與かれ様がない。なせと云つて、――

世人の崇める大人物は、

一面に又俗物でなくては。ゲーテ、

第四一二節

私は、實際上の善行に多大の、寧ろ絶對の價値を付して、此をば人間の最大の目的としてゐる様な哲學者に、以下のことを良心に訴へて自問自答して貰ひたい。即ち彼等には至極に道徳的な此善行萬能の説は、其根底に於て或種の利己的意義を含んだものではなからうか。彼等は密かに若し善行が獨專的の價値を失つたならば、世界に危険を來たしはせぬかといふ杞憂に手傳はれてはゐないか。随つて

又彼等の善行に對する熱心な辯護は人類の永遠の福祉といふよりは、當面的の幸福や安全を計つてのことではないかと。——然るに獨り私の哲學丈は、倫理を説くに當つて善行以上に超越し、夫よりも一層高貴な徳行、——即ち捨行道アスケシを主張する。善行とは所詮他人の善と自分の善とを同一視するとか、又は稀には前者に一層の重きをおくことであるから、何所迄も相対的の働である。即ち他人の善に關する自分の考方や態度に應じて、自分の善に對する願望や欲求にも變化を來す。そこで此丈のことが果して、人類及び世界の存在に對して根本的影響を與へることの出来るかは、頗る疑はしいこと、——寧ろ想像し難いこと、云はねばならぬ。

第四一三節

此迄の倫理哲學は、基督教の禁欲的傾向について何事をも説いてゐなかつた。(之はつまり凡ての哲學者が樂天家であつた爲)。然るに基督教其物は虚妄に基い

たものでなく、明かに最上の倫理的現象であるから、此事實は凡ての在來の哲學者が虚妄の見解を抱いてゐたことを示す。——虚妄の見解とは即ち樂天觀。

第四一四節

私が自分の哲學を空前の新説として自負するのは、只私が自分で其眞理を最も強く確信してゐるからだ。

第四一五節

私の著書にある文章は、孰も皆私が或思想に充たされて、夫を只其爲にのみ書留めておいたものだ。夫故之等は石灰や漆灰しつぐひなしに出來てゐる。又豫め或目論見を立て、おいて、頁から頁と一冊の書物を書き上げる手合のものと違つて、陳腐でなく冗漫でないのも其爲だ。

第四一六節

Natura nihil agit frustra: (自然は何事をも徒らには爲す)。——夫ぢやのに何

故自然は、全く世人に顧みられぬ様な、然も斯程に廣大で深遠な思想を私に與へたのであらうか？

第四一七節

私が自分の思想を凡ての有ゆる人々に傳へ様とすると、公衆といふ時代の塊は大き過ぎて見え、自分を理解し得る一部にのみ傳へる氣になると、目にも留らぬ程少さく見えてくる。

第四一八節

昔から孰れの思想家も、自分の時代を最惡視してゐたことは、私も疾より承知してゐる。したが——白狀すると、——私にはまだ未練の迷があつて——。

第四一九節

私の時代と私とが、互ひに相扞格しあつてゐること丈は明かだ。然し後世と云ふ法庭で、訴訟に勝つのは果して孰らだらうか？

第四二〇節

國王などは幼少の時から一生涯を通じて、人間以上のものであるかの様に仕へられてゐるから、後には其とを彼等自身でも確信して、不斷に最上の主權者であると云ふ打消し難い自尊心を持つ様になる。之に反して私や私と同等の人々は、幼年時代から一生涯の間他人に對等者として待遇されるから、(よし然うとは認められてゐないにせよ)、何時かは自分でも對等者の積になり勝で、後に及んで確たる相違に氣付いた所で、夫は時期が遅過ぎてゐる上に斯様な相違は時々刻々に他から反抗を受け、只自分一個の自覺として存するのみであるから、實際に王者的の威儀を持つことは稀と云ふよりも寧ろ不可能である。然も此王者的の威儀こそは其實我々のみに相應したもので、此とに就ては Gracian も次の如くに云つてゐる。
 todos sus dichos y hechos van rebastidos de una singular, transcendental magestad.

(彼の凡ての言葉と行とは、超然たる獨特の尊嚴を以て覆はれたり)。

第四二一節

前夜を熟睡することの出来なかつた凡ての日は、自分が本當の自分として暮した日ではないから、當然私の生涯から削除すべきものだ*。

* 睡眠不足は心身の不例を來すから。(私註)

第四二二節

比 喩

小猫に紙玉を投げてやると、轉ばしたり飛付いたり前足で弄つたりする。之は小猫が紙玉を自分と同じ様なもの、——生あるものと思つてゐるからだ。然し小猫が大きくなると此迷も失せ、紙玉を自分と同じなものでないと知つてくるから、いくら投げてても其儘にして戯れ付かぬ。斯う云つても此比喩の分らぬ人は、アテネのチモンに聞いてみるがよい。

第四二三節

獨逸の公衆と俗書とは、よく／＼の腐れ縁があるものと見えて、私の著述には手も觸れずに、Fries, Hegel, Krug, Herbart, Salat 等のものに嚙り付いてゐる。

第四二四節

私は前代の何人にも勝つて、眞理の秘密を闡明することが出来た。然し、若し現代よりも一層俗悪な時代を切抜けたと云つて、自負することの出来る人があつたならば、私は此上の望として其者にあやかり度い。

第四二五節

小人揃ひの中では身の用心が第一で、自分でも同じ小人らしく振舞ふのが安全だ。さすれば彼等は上機嫌。だが！ quos ego ——。(あゝ何と云つてよいか——)。

第四二六節

世人は私の働を全然疎外し無視しておきながら、一方には凡庸拙劣の學者を崇拜して、殆んど私を自暴自棄せしめ様としたが、幸にも私は敗北しなかつた。さ

もなくして私が尙も著述の傍、俗間の名聲に頼を掛けてゐたならば、私は疾の昔に著述を斷念する外なかつたであらう。

第四二七節

獨逸といふ國は、私を愛國者にすることが出来なかつた。

獨逸人を讚美せよだと？——私が此國で受けた待遇とそんな愛國心とが、同じ分銅で量られやうか。

第四二八節

私の哲學やゲーテの色素論の運命をみても、獨逸の思想界が如何に賤陋劣惡至極の精神に支配されてゐるか、明白に分る。

第四二九節

哲學教授の先生達も、私に對しては最早鳴を靜めて貰ひたいものだ。多分彼等は仰天するであらうが、私は大膽に告白する。——私は哲學の看板を釣るしてお

いて、猶太出來の神話を説き立てることなどを、自分の本領とは認めないと。夫から世人にも云つておく。——汝等が相も變らぬ例の同じ物語を、此の上百年間も聽問した所で、果して何れ丈の進歩になると思つてゐるのか？

第四三〇節

「然し猶太人は神の選民である」。——然うかも知れん。然し話はちと違ふ。彼等は私の所謂神の選民ではない。Quid multa? (然らば何か?) 猶太人は彼等の神の選民で、其神は又猶太人の選んだ神で、局外者には何の係はりもないことなのだ。

第四三一節

私は正直に白狀するが、動物の姿を見ると直ぐに心から楽しく喜ばしくなつてくる。犬は殊更で其他凡ての自由に育つた動物、鳥、虫——何でもよい。之に反して人間の姿は、殆んど何時でも私に非常なる惡感を與へる。何故なれば人間の

様子は、稀有の例外はあつても大抵皆、肉體の醜さ、汚らはしい情慾と賤しい欲望との見え透く不道德な振舞、愚昧と無智との仕草、種々雑多の痴態と忌むべき習俗の結果である身の廻りの不潔不淨といひ、有と有ゆる悪相邪形を呈してゐるからだ。

夫故に私は人間を避けて植物の世界に逃れ、其處で動物に出會すと始めて氣が晴れる。人は何とでも云ふがよい！意志の現はれは最高の程度に達すると、美しい所か最も厭はしい形相を表はす。夫で白哲の顔色は自然に反したものの、又（北國の情けない習ひであるとは云へ）身體の全部を衣服で包んだのも醜い姿だ。

第四三二節

世人の一部は、哲學の教授等と其一味の徒黨共が、私に石や土塊を投げつけて、然も夫が遂には自分等の頭上に落ちて來るとも知らぬ愚かさを見物したことであらう。私は又何うかといふに、遙かに高い輕氣球の中から、下界で不良少年共が

石を投げ上げ様とあせつて却つて腕を挫いてゐるのを、望遠鏡で見下ろしてゐる様な氣分である。次には世人の方へも注意しておく。——彼等の私に對する暴狀は、其實汝等の手の内にある善い物を抜き取つて惡るい物と掬り換へやうといふ、不正の工たくなみに過ぎぬことを悟るがよい。

第四三三節

先生達は、私に最少し鄭重に出て欲しいのかも知らぬ。したが私には出來ぬ。私には彼等に相應した尊敬しか拂へないのだ。

第四三四節

虫共が私の體を直からだきに食ひ盡して了ふといふ考は何でもない。——然し哲學教授等が私の哲學を！——思ふてみても身が慄ふるえる。

第四三五節

私の哲學は人智の範圍内に於ての、世界といふ謎語の正確な判釋で、此意味に

於ては天啓であるとも云へる。故に真理の靈に充たされて出来たもの、主著の第四卷目の數個所などは、聖靈に授けられたものと見てもよい位だ。

第四三六節

汝等の耳には真理が異様に聞えるといふのか。氣の毒なことではあるが、かと云つて私の態度を變更する譯にはゆかぬ。

第四三七節

如何なる時代にも區々の個人が、有ゆる事物を通じて真理を感じ夫をば斷片的に言表はしてゐたが、私となつて遂に真理の全體が會得された。

シヨールペンハウエル隨想錄終

エマーソン原著
高橋五郎先生譯

(三版)

處世論

總クローヌ美本
全一冊
特價金壹圓
郵税拾貳錢

- 次目
- ◎運命。
 - ◎勢力。
 - ◎富有。
 - ◎修養。
 - ◎禮儀。
 - ◎禮拜。
 - ◎餘論。
 - ◎美。
 - ◎迷想。

米文豪エマーソンの「ゴングダクト、オプ、ライフ」を翻譯したる所謂「**深遠**なる思想に**富**なる想像を**有**り觸れたる**成功談**の如く**淺薄**なるものにあらず、**譯筆**又**精嚴**にして其**跌宕**奧妙なる文章思想を解釋す深高なる**處世經**として何人も一國民新聞評讀すべし」

故田岡嶺雲譯註

◎全部見本は往復端書にて申込あれ

和譯漢文叢書

中村不折畫伯意匠裝釘
四六版總クロス美本
全十冊
正價計金拾參圓八拾錢
全部一時に注文
は郵税を要せず

復古は即ち維新なり、ルネーサンスは希臘古學の研究より新らしき歐洲の文明を生めるに非ずや、所謂漢學の復興なる者も亦豈に守舊思想の發動としてのみ見る可けんや、進歩に資せざる復興は無用也。漢學復興にして若し新らしき何物をも我が人文の發達の上に加ふること無からしめば、骨董の玩弄以上に果して何の意義ありや。

既に漢學の復興にして骨董的蕪弄に終る可からずとせば、其研究は新らしき方法によらざる可からず、新らしき時代は新らしき様式を要求す、今日は即ち漢學研究の方法に一革命を見ざるべからざる秋に非ず耶。我が漢文和譯叢書は實に此の漢學新研究の爲めに新時代の要求に應じて生れたる者也。

夫れ新時代が漢學の上に要求する所は、其外形に非ずして、其内容にあり、其修辭に非ずして、其思想にあり、今日は漢文として漢支を讀修するを要するの時代に非ず、否

繁劇なる今の時代は、漢文のまゝに漢文を讀むが如き迂濶なる方法を容さず。

且つ漢文は之を時文に翻譯するが爲めに甚しく原文の妙味を損する者に非ず、既に往時に於ても邦人の漢文を讀むは反點棄假名の法によりて翻譯して之を讀みたりし也。今之を假名交り文に書き下したりとて漢文の妙味を咀嚼する上に於て何の逕庭かあらんや、必ず漢文のまゝに非ずんば漢文の妙趣を味ひ得ずとするが如きは一種の迷信のみ。

既に甚しく原文の妙趣を破らずして而して時勢の新要求に應ずべき唯一の漢學新研究の方法は即ち漢文和譯の上に存す。我が漢文和譯叢書は實に諸他和譯叢書に先だちて出で、漢文研究の上に破天荒の試をなして一新紀元を開きたる者也。其譯文の正確と挿註の簡淨とは世既に定評あり、必ずしも贅せず。

本叢書は原文の一字を換へずして明瞭なる假名交り文に書き下し、且つ故事熟語及稍難解の句には皆懇切明晰なる註解を挿入したるものなれば、之を通讀する者は些の遺憾なく千古の名文を味ひ得ると共に其中の成語成句等を學び得べく、之を原文と對照する者には無上の好案内たるべし。書目左の如し。

故田岡嶺雲譯並註

●全拾貳冊

正價金拾參圓八拾錢
一時に御注文は郵料不要

和譯漢文叢書

不折畫伯裝釘意匠
總クローヌ高雅堅牢美本

第一編 和譯老子莊子

全一冊 正價金壹圓貳拾錢
郵稅金拾貳錢

虛無主義自然主義は必ずしも近代の產物に非ず、二千載の前、天既に絶高の才を支那に下し、絶奇の文によつて虚無自然の哲學を説かしむ、老莊是れ也。今の世の名利に焦燥し、死生に悶悶し、小是非小嫌疑の岐路に彷徨する者は、須らく來て此書に參すべし。汝を契けて現實の桎梏より脱し窮冥恍惚の無礙自由に遊ばしめん。

第二編 和譯韓非子

全一冊 正價金壹圓貳拾錢
郵稅金拾貳錢

韓非子は東洋のマキアヴェリ也。慘酷なる其説、冷峭なる其文、觸るゝ所皆血を見る。人情輕浮刻忍に、誦詐陰險、誣陷擠排是れ事とする今の時に當りては、韓非が權謀術數の論も、亦處世の要訣たらん。

第三編 和譯戰國策

(地圖附) 全一冊 正價金壹圓貳拾錢
郵稅金拾貳錢

戰國の時策士説客雲の如し、旁午として列國の間に馳騁し、其智を揮くし、其辯を窮めて以て縱談横論す、舌如火あり唇如燭を噴く。戰國時代は實に支那に於ける思想の最高潮時代たると共に、又辯論に於ける最華最麗時代也。一部の戰國策は即ち人尚智辯の結晶にして而して又險仄なる處世上の要訣たり。

第四編 和譯荀子

全一冊 正價金壹圓
郵稅金拾錢

荀子は孔孟と相並んで亦儒教の一大オトリチ也。而して其性惡論は止に近世の西洋倫理説と一致す。本書依例譯文暢達註釋明透の外に巻頭に四十頁に渉る荀子評論を掲ぐ。荀子を中心として縱横に支那思想を論破せる者、是れ一部の先秦哲學小史なり、壓搾せられたる支那思想史なり。

第五編 和譯史記列傳

上下二冊 正價各金壹圓貳拾錢
郵稅各金拾貳錢

史記は二十二史の冠冕にして、其文は千古の絶稱たり。就中列傳七十、英雄の風雲、兒女の柔情、正邪忠奸、賢愚淑慝、各人各様の態を盡して、筆鳴り、墨躍る。苟も漢文をいふ者は即ち此書を讀まざる可らず。

第七編 和譯七書

附 鬼谷子 全一冊 正價金壹圓
郵稅金拾錢

◎武經七書、即ち孫子、吳子、司馬法、尉繚子、三略、六韜、唐太宗李衛公問對と鬼谷子とを收む。甲兵を陳れ矛戟を列れて而る後之を戰と云ふのみに非ざる也。宇宙は一大戰場也、何れの處何れの時か戰にあらざらん。武經七書之を兵法といふと雖も、亦一種の處世術也。人に克ち、人を服し、人を制する秘訣自ら備はる。鬼谷子に至つては縱横家の祖、揣摩掉闔の權謀を説いて微に入り妙に通ず。

第八編 和譯淮南子

全一冊 正價金壹圓貳拾錢
郵稅金拾貳錢

淮南子(ふんなんじ)は漢代に於ける一種のエンサイクロペヂヤなり。儒と云はず墨と云はず道と云はず先秦諸千百家の成句苟くと益ある者は盡く收めざるなく、上は三皇五帝より下周秦に至る迄の故事苟くも傳はる者は悉く載せざるなし。而して人事百般に涉りて此が應用を説く、淮南子一部は實に一種の處世訣、道德訓たるのみならず、亦一種の金言集なり、格言集なり、將た又一種の文章辭典なり、故事辭典也。

第九編 和譯墨子列子

全一冊

正價 金壹圓拾錢 郵稅 金拾貳錢

戰爭を非とする平和論者たり、奢侈を非とする勤儉論者たり、而して又有神論者たり博愛論者たる墨子の説は、周末諸子中の一異彩也。其説亦現代の時弊に中る者多し、但其書錯簡誤脱頗る多く、先秦諸子中最も難解と稱せらる。嶺南先生其一家のみに據り傍ら古今の諸註を參酌して之を校訂し、渾然として復元暇を留めず、本文既に讀易きを致し挿註また叮嚀を極む、墨子竟に難解を憂へず。列子は即ち道家中別に一家を樹つる者、其説は虛泊寥澗、其文は簡勁宏妙、老莊と併せ讀むべき者也。

第十編 和譯春秋左傳(地圖年) 上下二冊

正價各金壹圓貳拾錢 郵稅各金拾貳錢

孔子春秋を作りて亂臣賊子懼る、左氏乃ち經に因りて史實を敷衍す所謂左氏傳是れ也。春秋に三傳ありと雖ども叙事の詳贍なると文章の艶富なるとに於ては即ち獨り左傳を推すべし、其の叙事は即ち周末の歴史に於ける唯一のオーソリチーにして其の文章は或は之を莊子と並稱して先秦文中の白眉なりと絶稱せらる。但動もすれば行文奇古にして讀み難きを憂ふ。本書譯し得て極めて平明、以て讀書子座右の好侶とするに足らん。

第十二編 和譯東萊博議

全一冊

正價 金壹圓參拾錢 郵稅 金拾四錢

東萊博議は左傳の史論集たるに過ぎずと雖ども、呂東萊が識見學問文章を傾倒して盡く此の中に在り。立論切實、筆端縱橫、言は必ず肺腑に入り、説は必ず情偽を決す。左傳を讀む者は併せ看んことを要するのみならず、苟くも文章に志ある者此書に熟せば、庶幾くは筆を執つて窘滞なく想を道る自在を極むるを得ん。

和譯漢文叢書 對す 評文中 拔粹

- 東京朝日新聞評 譯文の簡淨と註解の明晰とは此書の特徴也(明治四十四年三月二十四日) ●萬朝報評 つくづくこの最も進歩せる形式なるを思ふ也(明治四十四年七月三十一日) ●報知新聞評 譯文註釋共に嶺雲氏獨特の異彩を放つ(明治四十四年十月二十八日) ●讀賣新聞評 多くは譯者其人を得ず加ふるに杜撰粗漏の譏りあるを免れざるに獨り 本叢書の嶄然一頭地を抜ける所以は云々(明治四十五年四月二十日) ●二六新聞評 近時出版せられたる此の種の著譯、本書に比肩すべきものあるを見ず(明治四十三年七月二十一日) ●日本及日本人評 眞に漢文和譯書中の魁とす(明治四十四年八月一日號) ●大阪毎日新聞評 近時續出の漢文和譯物中の白眉となす(明治四十五年五月二日) ●東京毎日新聞評 吾人は未だ嘗て此の如く氣の利きたる思付に接せざる也(明治四十三年八月六日) ●時事新報評 印刷裝幀も亦其姉妹篇にゆづらず 頗る善美を盡したる(明治四十四年三月二十一日)

備内

此篇、人臣固より信す可からず、其妻子も猶頼む可からざるを説く。

人主の患は、人を信するにあり、人を信すれば、則ち人に制せらる。人臣の其君に於けるは、骨肉の親みあるにあらざるなり、勢に縛せられて事へざるを得ざるなり。故に人臣たる者は、其君の心を窺覘ウカガフして須臾も之れ休むことなし、而も人主は怠傲して其上に處る、此れ世に君を劫し主を弑するある所以なり。人の主となりて大に其子を信すれば、則ち姦臣は子に乗じて以て其私を成すことを得。故に李兌は趙王の傅となりて主父武靈王を餓えしめき。人の主となりて大に其妻を信すれば、則ち姦臣妻に乗じて以て其私を成すことを得。故に優施僂施は麗姫晋ノ獻公に傅となり、申生子太を殺して奚齊麗姫ノ子を立てぬ。夫れ妻の近きと、下の親きとを以てして、而も猶ほ信すべからずんば、則ち其餘は信すべき者無けん。

且つ萬乘の主、千乘の君の、ハ后妃夫人、適嫡子の太子たる者ハレ、或は其君の蚤く死せんことを欲する者あり。何を以て其然るを知る、夫れ妻は骨肉の恩あるにあらざるなり、愛すれば則ち親み、愛せざれば則ち疏し。語に曰く、其母、好愛せらるれば其子抱かると。然らば則ち之が反對たれば、其母惡まるれば其子釋てられん。丈夫、五十にして色を好むこと未だ解けざるに、婦人は年三十にして美色衰ふ、衰美の婦人を以て、好色の丈夫に事ふ、則ち身疏賤せられて、其子の主とならざるかを疑ふ。此れ后妃夫人の其君の死を冀ふ所以なり。

唯母、后となりて子、主たれば、則ち令の行はれざることなく、禁の止まざることなし。男女の樂み、先君先代より減せずして、萬乘を擅にして疑はれず。此れ酖毒チン扼毒昧暗殺殺の用ひらるゝ所以なり。故に挑左春秋名に曰く、人主の疾みて死する者、半に處る能はず半以上殺。人主此理知らざれば則ち亂、資多し禍根多。故に曰く、君の死を利とする者衆ければ、則ち人主危しと。故に王良御者の馬を愛し、越王勾踐の人を愛せ

中村不折先生 小鹿青雲先生共著

(新刊)

支那繪畫史

不折畫伯裝釘意匠
菊判總クローズ
製美本 全一冊
正價 壹圓五拾錢
郵稅拾貳錢

▼我國に於ける始めての新著

支那繪畫は日本繪畫の父母也、支那繪畫を知らずして日本繪畫を語るは妄なり、本書は斯道のオーソリチーたる著者が多年の蘊蓄を傾盡して着手以來實に三年餘の星霜を経て完成せられ、添ふるに支那寫真版二十九葉と詳細なる人名索引とを以てせるものなれば、本書は即ち兼ては支那代表畫の畫帖とも見るべく或は支那畫家人名辭書とも見るべく美術に志あるもの、必ず一本を缺く可らざるもの也。

●時事新報評

『吾人は本書を本邦唯一の支那繪畫史とし深く推賞する者也』

終